

教養と「無秩序」

共通教育科目の「アメリカの文学と文化」(本年度からは「アメリカの文化」に改名)を開講して、今年で五年目になる。この間、この科目の内容を土台にした授業を医学部でも一度開講したし、他の大学でも類似の授業を提供した。つまり私としては、何度も行ってきた授業ではあるのだが、毎年内容や授業方法を改変してきたため、今年もまた新鮮な気持ちで教壇に立っている。

毎回とっている授業アンケートによると、受講学生のおおよその評価はわるくないようであるし、市民開放プログラムにより出席して下さった市民の方々の中には、この授業を期に本格的にこの分野を学ぶ決意をした方もいらっしゃる。またおかげさまで受講希望の競争率もそれなりに維持できてきた。私の五年間の努力は無駄ではなかったように思われるし、またそう信じて、今週も少なからぬ時間を費やしてこの授業の準備に取り組んでいるわけである。

しかしながら、担当教員である私の意思に反してはいるものの、今のようなかたちでこの授業を学生に提供できるのは、今後それほど長くはないかもしれない。共通教育の語学科目「英語」は慢性的な不足であるにも関わらず予算もつかないために、非常勤の担当者を増やすこともままならないし(つまり絶えず常勤でカバーすることが求められている)、一方で教育地域科学部は教職大学院設立のため、大幅な改組が予定されている。またそもそも国立大学法人福井大学そのものが、「新自由主義」の風の中で厳しい現実と直面している。いついかなる理由でこの授業を提供できなくなるのか、私にも分からないが、ただ少なくとも来年度は数名の方からのご厚意のおかげで開講できる。分かっていることはそれだけだ。

それにしても混沌の度合いはますます色濃い。ある時、学生運動の「拠点」のようなものはなく必要があると誰かが

教育地域科学部(異文化交流講座) 辻 和彦

思いつき、旧教養部が潰される。しかし、また別のある時、オウム真理教による一連の事件のようなことが起こると、「教養」をなくした大学が、アキバ系オタクや、ニート・フリーター予備軍や、カルト教団の巣窟と化す危機が声高に叫ばれ、再び「教養科目」の重要性が論じられるようになる。あるいは、各都道府県に一つ医学部を「つくる必要」が生じた際には、「特殊な事情」のためにわざわざ既存の国立大学とは異なる大学が設置され、状況が変わって「財政赤字」が最重要視されるようになれば、それらはあっさりと近隣の大学と統合される。教育学部に「教員免許をとらないコース」(新課程)を「つくる必要」が生じればそれは慌てふためいてつくられ、必要ないとになれば、転がらんばかりの勢いで縮小される。近年の「ゆとり教育」を巡る文部科学省の混乱ぶりもまだ記憶に新しいが、この国の教育・研究行政は、頂点から底辺に至るまで大局を見据えた視点がいつまでも欠落したまま、こうして「よりよい」とは言い難い方向へひたすら漂流を続けていくのであろう。

こうした秩序なき荒波の中で、私のような末端の大学教員にできることは、少しでも「よりよい」授業を受講学生に提供できるよう努力していくことだけだ。彼らの未来にあるものが、我々の時代のものより「よりよい」行政であり、「よりよい」教育制度であり、「よりよい」社会であることを願いながら。そしてこれは私個人に留まるだけではなく、多くの諸先輩方が感じられていらっしゃる思いではないだろうか。だが「教養によって、たしかに明白な事理に到達しようとする努力」(マッシュュー・アーノルド『教養と無秩序』)がどこからますます失われつつある現在、そうした願いは果たして叶えられるのだろうか。